

全日本クラシックカメラクラブ(AJCC)

研究会報告

「私の珍品カメラ」

会員番号0022 高島鎮雄

平成26年11月12日(土)
於日本カメラ財団(JCII)6階会議室

研究会のテーマは、会員の皆さんのご希望を伺った上で、研究会担当幹事が原案を作成、幹事会で最終的に決めている。しかし回を重ねた結果、しだいに案が枯渇してきているのが現状だ。実は今回からスタートする「私の珍品カメラ」は、かく言う私のアイデアである。珍品とは甚だ抽象的な言い方で、何をもって珍品とするのかは難しい問題ではある。しかしかえってその不確定さのゆえに、どんなカメラでも俎上に乗せることができ、したがって会員の誰でも発表することができる考えたのである。以後、いろいろな会員によって、研究会が続く限り引き継がれていくことが望まれる。

ところで言い出しっぺが第1回めをやれと言われて、はたと困った。私はカメラのコンセプト、メカニズム、デザインのすべてにわたって興味があり、かなりユニークな、時にはエキ

セントリックなカメラを相当な数集めてきた。しかしそれらは、それゆえに一般的ではなく、またかつての「カメラレビュー」誌や、このNews Letterにも書いてしまっている。そこで今回はみなさんがよくご存知のカメラなのに、ちょっと珍しい仕様のものを何台か拾って、ご紹介することにした。結果的に、比較的好く知られたカメラで、珍しいレンズが付いたものなどが中心になると思う。「へえ、あのカメラにこんなレンズがついたのがあったんだ!」「こんなバリエーションもあったんだ!」と単純に珍しがっていただければ嬉しい限りである。

パテント・エチューイ 6.5×9cm ルクスス

(写真1)

私の好きなハンド&スタンドカメラから始めよう。KWパテント・エチューイはたんだとき一、二の薄さを競うが、構造簡潔で使い易

く、一見華奢だが実はなかなか強靱。私は最近集中的に集めている。6.5×9cm大名刺判と9×12cm大陸手札判、1段伸ばしと2段伸ばし、上下シフトの有無、前玉回転と手送りとラック&ピニオンの焦点調節などバリエーションは豊富。レンズもトリオプラン、ラディオナー、ウノフォーカル(シュタインハイルのドッペルアナスティグマート)、クセナーと様々で、通常はテッサーが最上位にくる。ところが本機はブラウベルの「ズーブラコマー」10cm、F3.8という珍しいレンズが付いている。新コンパーはリムにラーメン井様の装飾模様の入った最初期生産品。ボディと蛇腹の革は黒のほかこの赤と青と茶がある。1930年頃。

パテント・エチューイ 6.5×9cm ルクスス

ドッペル・プラズマート12cm、F4.5付(写真2)

これもパテント・エチューイの青い革張り/蛇



写真1 パテント・エチューイ 6.5×9cm ルクスス
ブラウベル ズーブラコマー 10cm/F3.8付



写真2 パテント・エチューイ 6.5×9cm ルクスス
フーゴ・マイヤー ドッペル・プラズマート付



写真3 ベルクハイル 4.5×6cm ルクスス

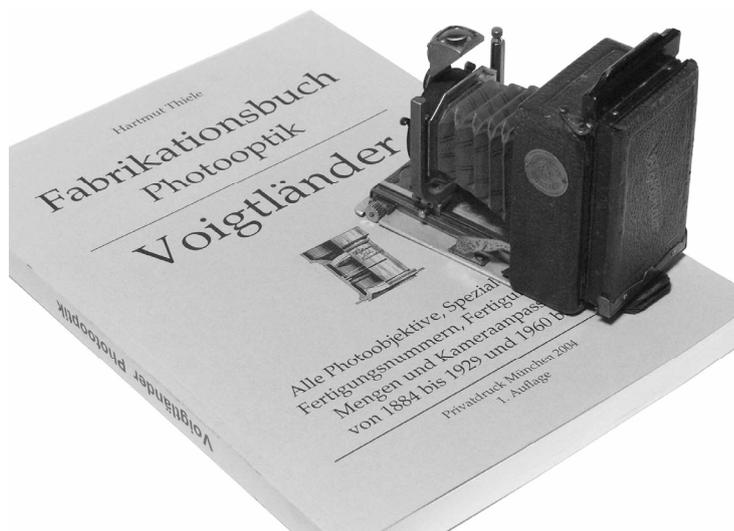


写真4 ファブリカティオンズブーフ・フォトオプティク/フォクトレンダー

腹。レンズはこれまたフーゴー・マイアーのダブル・プラズマート12cm、F5.5という珍しいもの。言うまでもなくプラズマートはカール・ツァイスにあってプロター、ドッペル・プロター、ウナー、プラナー、テッサーなど一連の高性能レンズを生んだパウル・ルドルフ博士が、ツァイス退社後に設計したレンズ群である。製造をフーゴー・マイアーに委嘱し、ハノーファーのK. Rudolph籍としたものと、Dr. Rudolph特許のHugo Mayer籍のものがある(本機のレンズは後者)。面白いことにシャッター面の絞り目盛りには広角8cm、D プラズマート、テッサー4.5と三つのスケールが刻まれている。8cm、10.5cm、12cmと交換して使ったものらしい。1932年頃。

ベルクハイル 4.5×6cm ルクスス (写真3)

フォクトレンダーのベルクハイルといえば、6.5×9cm判と9×12cm判の緑の蛇腹に緑のロシア革を張ったボディをもつモデルがポピュラーだ。しかし4×6.5cm判のルクススは蛇腹と革張りが茶色で、金属部分は金メッキと一層豪華。その上数も少なく、高価だ。通常レンズは8cm、F4.5のヘリアだが、本機にはフォクトレンダー自製のドッペルアナスティグマート”ラディアール”8cm、F6.8が付いている。これは1902年にH.ハーディングがヘリアを完成するまでフォクトレンダーの高級機に使われていたレンズで、ヘリア時代になってからも用いられた。レンズ番号は204890で、

1923年に202845から205044まで200個作られたうちのの一つである。

ファブリカティオンズブーフ・フォトオプティク/フォクトレンダー (写真4)

何でラディアールのレンズ番号がわかるのか不思議に思われる方もあろう。その秘密がこのヘルムート・ティエーレ編のファブリカティオンズブーフ・フォトオプティク/フォクトレンダーである。ティエーレは現存するレンズメーカーの資料室で製造記録を調べ、レンズ番号別、レンズ名別などのリストを作り、コレクターのために自費出版しているのだ。それには製造年、使用カメラなども併記されており、コレクターにとっては貴重な資料になっている。私の手元にはフォクトレンダーの他にカール・ツァイス、ヨーゼフ・シュナイダー、エルンスト・ライツ、マイアー・オプティク、ローデンシュトック、レティナ用ローデンシュトックなどがある。カメラの年代特定などに必要な方は、レンズ名と番号をお知らせいただければ、可能な限りお調べする。

コリブリ(ノバー付およびビオター付)(写真5)

ライカへの対抗機として、ツァイス・イコンのドクター・アウグスト・ナーゲルが設計したとされる127/3×4cm判のユニークなカメラがコリブリ(ハチドリのこと)だ。固定の沈胴レンズは5cmが標準で、ノヴァーF4.5、テッサーF3.5、同F2.8があるが、ごく稀にこのカール・ツァイ

ス製の明るいビオター4.5cm、F2付きがある。左がノヴァーF4.5、右がビオターF2の両極端だ。1930年。

コリブリ側面比較 (写真6)

ビオターは焦点距離が5mm短いので、沈胴の伸びが規制されている。このビオターのレンズ番号は1365156で、1364501から1365232まで732個作られたうちのの一つ。ティエーレによると使用カメラはコリブリだが、G.A.クラウスのペッキーにも供給されたとなっている。

イハゲー・パルヴォラ (写真7)

イハゲーのパルヴォラ(最初はクライン・ウルトリックス名であった)は、スプリングカメラのウルトリックスから蛇腹を取り除き、長く伸びるダブルヘリコイドにしたもので、共通のボディで3×4cm判と4×6.5cmとがある。本機は3×4cm判で、レンズはイハゲー・アナスティグマート、クセナー、クセノン、テッサーなど多種がある。その頂点に立つのがこのビオター4.5cm、F2。レンズ番号1364844で、ティエーレがコリブリ用としている732個の一つで、前述のコリブリとは312番違い。1939年。

Die Umbauten der Leicas (改造ライカ)

(写真8)

私は故片山良平さんのお話や書籍などを通じ、ライカは広くて奥深い危険な世界だと



写真5、6 コリブリ、ノバー5cm/F4.5付(写真それぞれ左側)とビオター4.5cm/F2付(同右側)



写真7 イハゲー パルヴォラ



写真8 Die Umbauten der Leicas (改造ライカ)



写真9 Umbau Leica (I A→III F)

写真10 Umbau Leica (I A→III F) エルマー-F2.8 付



写真11 Umbau Leica (III C→III F)

思い、敬遠していた。しかしすべてのカメラの評価の標準がライカであることに気付くIII Gを一台入手したのが運の尽きで、とうとう底知れぬ泥沼にはまってしまった！ ちょっとでも尋常ならざるライカはひどく高価で、私のコレクションにはご参加いただけない。私のコレクションの中で珍しいのはUmbau (ウンbau/改造) ライカで、改造と言っても市中で行われたものではなく、ライツ自信が顧客から受託して旧型を新型のスペックに改新したものである。

カバーはシンクロのコンタクトナンバーが最初から刻まれており、ウンbau・ライカ用に作られたものであることがわかる。刻印のERNST LEITZとWETZLARとの間にGMBH (株式会社)が入っている。生産型にこれが入るのはIII Fの途中からである。本機のレンズは(もちろんスクリューの)エルマー-F2.8！

Umbau Leica (I A→III F) (写真9)

私のウンbau・ライカの中で最も凄いのがこれで、1928年にボディ番号18146のI (A)型として作られ、最終的に戦後のIII F仕様にまで引き上げられたものである。しかも私の推定では戦後に一挙にIII F化されたのではなく、1932年にまず距離計連動のII型になり、次いで1933年に低速シャッター付きのIII型に、さらに1935年に1/1000秒付きのIIIaになり、そして戦後にシンクロが装備されたらしい。オーナーは新型に買い換えることを良しとせず、執拗に新型の仕様に改造させたのだろう。

Umbau Leica (I A→III F) (写真10)

これは1930年製ボディ番号32386のI (A)を最終的にIII F仕様に刷新したもの。このトップ

Umbau Leica (III C→III F) (写真11)

これは比較的ポピュラーなIII CをIII F仕様に改造したもので、アメリカではIII C Synch.と呼ばれることが多い。トップカバーはもとのIII Cのままなので、シャッターの高速ダイヤルの基部にあるコンタクトナンバーは、別のプレートに刻印したものをネジ止めている。メーカー名のGMBHもまだない。

ナーゲル・フォレンダ70/II (エルマー付) (写真12)

ライカが出たついでに、ライツ製エルマー・レンズを備えた他社製カメラの例を。これはナーゲルのフォレンダ70/IIのルクススで6×9cm判なので、エルマーは105mmのF4.5。レンズナンバー104342は104260から104660まで399個のなかのひとつである。1932年頃。

ヴェルタ・グッキ3×4cm (写真13)

ライツ・エルマー5cm、F3.5を装備したヴェルタ・グッキ3×4cm。エルマーは通常高級機に使われるが、こんな大衆機に装備されることもあった。しかも前玉回転！ 1932年頃。

パーゼル製のフォーバ(Phoba) (写真14)

これも珍品のスイス、パーゼル製のフォーバ(Phoba)。実はドイツ、ハノーファーのオリオンヴェルクのリオ84AルクススのOEMだ。レンズはアナスティグマート・ティータ(Tita) 7.5cm、F4.5。私の手元に来た時には、フレームファインダーの前枠がなかったので、写真から割り出して図面を起こし、針金で自製した。1924年頃。



写真12 ナーゲル・フォレンダ 70/II エルマー付



写真13 ヴェルタ・グッキ 3×4cm エルマー付

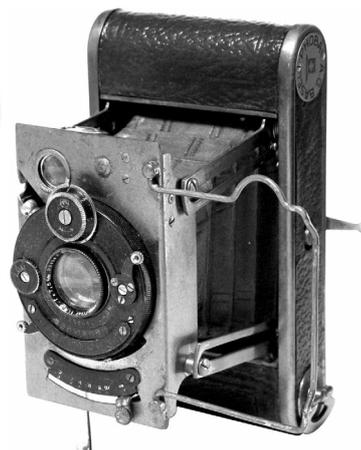


写真14 パーゼル製のフォーバ

アグファ・アンスコ・メモ (写真15)

シングルフレームの木製縦型ボックスカメラ、アグファ・メモの延長線上に作られた金属製カメラがアグファ・アンスコ・メモだ。通常は下のように24×36mm判だが稀に上のような24×18mm判がある(ファインダーの対物レンズで識別できる)。私の所有機の場合、レンズはシングルフレームがF3.5、ダブルフレームがF4.5だが、焦点距離はいずれも50mmで、したがってシングルフレームは望遠カメラということになる。1939～40年頃。

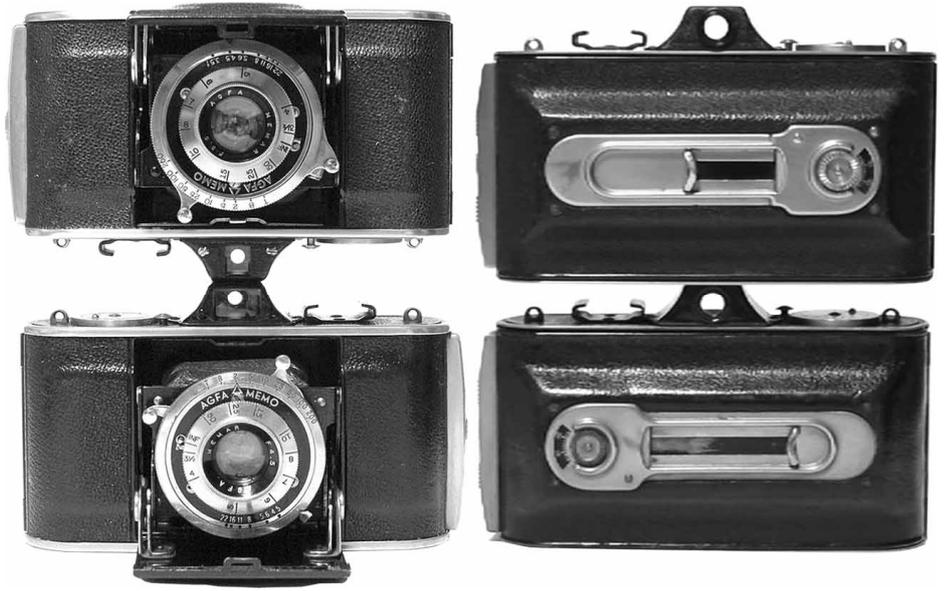


写真 15 アンスコ・メモ
画面サイズ、上が18×24mm、下が24×36mm

スナップショット・カメラ (写真16)

英国のダルメヤーがホートン・ブッチャーにボディを作らせ、自社のレンズを付けて販売したフィルムバック専用機がスナップショット・カメラ(1929年)。通常はハンマートーン塗装だが、本機は一部スムーズな塗装を残して薄い革が張られたデラックス。傍は1931年の珍しいロールフィルムモデル。これにも革張りのデラックスがあった。



← 写真 16 スナップショットカメラ
フィルムバック専用機と
ロールフィルムモデル